

令和3年度入学（一般選抜 後期日程）試験問題の出典

看護学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	－	苫野 一徳	はじめての哲学的思考	筑摩書房, 2017年より pp.14・24	筑摩書房

令和3年度 一般選抜・後期

## 看護学部

### 小論文 (90分)

#### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、3ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

# 問題訂正

○訂正内容

教科名 小論文

頁・問題番号・行 3ページ・問2・一番下の行

誤)

700 文字

正)

700 字

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(150点)

そもそも哲学とはいったい何なのか、その深奥にせまりたいと思う。

といっても、“テツガク”と聞くと、多くの人には、実生活に大して役に立たない、何だかよく分からない難しそうなことを考えているもの、というイメージを持つんじゃないかと思う。

たしかに、「私ってなんだろう?」とか、「時間ってなんだろう?」「愛ってなんだろう?」「言葉ってなんだろう?」「生きる意味ってなんだろう?」とかいったいかにも哲学的な問いは、それだけ聞くとあんまり役に立つ感じはしない。

哲学者と呼ばれる人たちも、そうしたさまざまなことがらの「そもそも」を、どこまでも考えずにはいられない人間だ。だからまともに相手をしたら、はっきりいって面倒くさくて仕方ない。

西洋哲学の父、ソクラテス(紀元前469-399年)は、古代ギリシアのアテナイで、道行く人びとに「ねえ君、君、恋とはいったい何だと思うかね?」などと問いかけて、多くの人をげんなりさせていた。

「それは胸のドキドキ」とか「食事もノドを通らなくなる気持ち」とかいおうものなら、ソクラテスは、「そんなものは恋の本質じゃない。単なる症状だ」みたいなことをいうものだから、人びとはついには、「はいはい、分かりましたよソクラテスさん。もういい加減にしてください」と、彼のもとを去っていくのだった。

そんなソクラテスに、ある時カリクレスという政治家がこんなことをいった(プラトン『ゴルギアス』)。

「ねえソクラテス、正義とは何かとか、徳とは何かとか、いい年した大人がそんなことばかり考えているのは滑稽だよ。若い時に哲学に熱中するのはまあいいとしても、あなたももうおじさんなんだから、もっと処世術とか、儲け術とか、そういう人生の役に立つことを考えたまえ」

ソクラテスの時代から、哲学は役に立たないとバカにする人はたくさんいたのだ。

でも、僕はあえていいたいと思う。哲学は、僕たちの人生に、ある独特の仕方ですべて役に立ってくれるものなのだ、と。

たとえば、今あげた私、愛、恋、生きる意味……。これらの本質を知ることができたなら、それってちょっとすごいことじゃないだろうか?

ちょっとすごいだけじゃない。本質をとらえること、これは僕たちが物を考える時の、実は一番大事なことなのだ。

たとえば教育について考えてみよう。もしも僕たちが、その本質について十分な共通理解を持っていなければ、教育論議は、それぞれがそれぞれの“教育観”をぶつけ合うだけの、ひどく混乱したものになるだろう。実際、ちまたの教育論議は、「叱るべきか、ほめるべきか」とか、「体罰はありか、なしか」とかいった対立に満ちている。

その意味でも、哲学が「そもそも教育とは何か?」と問うことは、とても大事なことなのだ。

もちろん、哲学者じゃなくても「教育とは何か?」と考えることはある。でも、こうした「そもそも」

を考えるための“思考法”を、2500年もの長きにわたってとことん磨き上げてきたものこそが、哲学なのだ。だから、僕たちがその思考法を身につけているといたないとは、思考の深さと強さにおいて圧倒的なへだたりがある。

そんなわけで、哲学とは何かという問いにひとこと<sup>ごと</sup>で答えるなら、それはさまざまな物事の“本質”をとらえる営みだということができる。

そんなこと本当にできるの？ そう思う人もいるかもしれない。特に現代は「相対主義」の時代。つまり、世界には絶対に正しいことなんてなく、人それぞれの見方があるだけだという考えが、広く行き渡っている時代だ。

たしかにももちろん、この世に絶対に正しいことなんてない。でもそれは、だからといって、僕たちが何につけても“共通了解”にたどり着けないことを意味するわけじゃない。

僕たちは、お互いに話をつづけていくうちに、「なるほど～それってたしかに本質的だ」と納得し合えることがある。だから、恋っていったい何なのか、教育って何なのか、といったテーマについても、対話を通して、その“本質”を深く了解し合える可能性がある。

繰り返すけど、それは「絶対の真理」とは全然ちがう。あくまでも、できるだけだれもが納得できる本質的な考え方。そうした物事の“本質”を洞察することこそが、哲学の最大の意義なのだ。

相対主義の現代、人びとは——哲学者たちでさえ——「絶対に正しいことなんて何もない」といって問題を済ませようとする傾向がある。「よい社会って何だろう？」「よい教育って何だろう？」みたいなむずかしい問いに直面すると、「ま、考え方は人それぞれだよ」で済ませようとする傾向がある。

でも、僕たちの人生にはそれでは済まない時がある。対立を解消したり、協力し合ったりするために、何らかの“共通了解”がどうしても必要になる時がある。

そんな時、哲学は、「ここまでならだれもが納得できるにちがいない」という地点まで考えを深めようとする。そしてすぐれた哲学者たちは、いつの時代も、もうこれ以上は考えられないというところまで思考を追いつめて、それを多くの人びとの納得へと投げかけてきたのだ。

(中 略)

なぜ人間だけが戦争をするのか？ ヘーゲルは、それは僕たち人間が「生きたいように生きたい」という欲望、つまり「自由」への欲望を持っているからだと考えた。だから人類は、互いに自分の「自由」を主張し合って、いつ果てるともしれない命の奪い合いをつづけてきたのだ。

一方が勝者になり、他方が奴隷になっても、そこで戦いが終わることはない。「自由」に生きたい人間は、「自由」を奪われることに我慢ができないからだ。だから、支配された者は、長期的に見れば必ず支配者に対して戦いを挑む。こうして人類は、一万年もの間戦争を繰り返してつづけてきたのだ。

富への欲望、権力への欲望、憎悪、プライド……戦争の理由はたくさんある。でもその一番底には、僕たち人間の「自由」への欲望がある。ヘーゲルはそう主張した。まさにヘーゲルは、人類がなぜ戦争をなくすことができずにきたのか、その“本質”を洞察したのだ(『精神現象学』)。

哲学のすごさは、こうやって問題の“本質”を明らかにすることで、その問題を克服するための考え方を切り開く点にある。

ヘーゲルの出した答えはこうだ。僕たちが本当に「自由」になりたいのなら、それをただ主張して殺し合うのはやめにしなければならない。かといって、権力者に国を治めさせても、大多数の人の「自由」は満たされない。

じゃあどうすればいいのか？ 考え方は一つしかない。お互いがお互いに、相手が対等に「自由」な存在であることを認め合うこと。そのようなルールによって、社会を作っていくこと。おそらくこれ以外に、僕たちが自由に平和に生きる道はない。

(中 略)

よく、哲学は答えのない問題をただぐるぐる考えているだけだといわれることがある。でもそれはまったくの誤りだ。すぐれた哲学者たちは、前の時代の哲学者たちの思考を受け継ぎ、そしてそれを確実に推し進め深めてきたのだ。

答えのない問題を考えることこそが哲学だ、ともよくいわれる。でもそれもやっぱり誤りだ。少なくとも、それは哲学の半分しかいい当てていない。

残り半分の、もっと大事な哲学の本質がある。

それは、その問題をとことん考え、そしてちゃんと“答え抜く”ことだ。

何度もいうように、それは決して絶対の正解なんかじゃない。でも、それでもなお、哲学は、できるだけだれもが納得できるような“共通了解”を見出そうと探究をつづけてきたのだ。

(苫野一徳『はじめての哲学的思考』, 筑摩書房, 2017年, pp.14-24より, 一部改変)

問 1 作者が述べている哲学とはどのようなことか、100字以内で説明しなさい。

問 2 下線部について、作者が考える哲学の探究を基に、あなたの経験から“共通了解”が必要になった場面を例示しながら、あなたがたどり着こうと考える“共通了解”の内容とそのための方法について700文字以内で説明しなさい。なお、結果的に“共通了解”が得られたかどうかは問わない。